

# 資料編



## 地域包括支援センターと社協の協働による包括ケア促進モデル事業 検討委員会 設置要綱

(目的)

第1条

改正介護保険法で設けられた地域包括支援センターには、介護予防や地域の包括的ケアの中心的役割が期待されている。一方、区市町村社協は、これまで小地域福祉活動、権利擁護事業などを通じ、地域づくりを行ってきている。検討委員会では、モデル地区における地域包括支援センターと区市町村社協との協働を支援し、「包括支援ネットワークの構築」と「権利擁護」を確立するために必要となる基本的な視点や手法を開拓することを目的とする。

(委員会の役割)

第2条

- (1) 事業全体の企画
- (2) モデル地区活動の進行管理および支援
- (3) 成果と課題の分析・評価
- (4) 報告書の作成
- (5) その他、本モデル事業に必要な事項

(委員構成)

第3条 検討委員会は、次の各号に掲げる者10名をもって構成する。

- (1) 学識経験者
- (2) 市民活動団体関係者
- (3) モデル地区関係者
- (4) 東社協・センター部会役員（地域包括支援センター職員）
- (5) その他、本委員会に必要と思われる者

(委員の任期)

第4条 平成19年4月1日～平成21年3月31日（2年間）とする。  
ただし、モデル地区関係者は、モデル地区指定期間とする。

(正副委員長)

第5条 検討委員会には正副委員長各1名を置く。  
2 委員長は、検討委員会の進行管理、総括を行う。  
3 委員長に事故あるときは、副委員長がその職務を代行する。

(検討委員会の招集等)

第6条 検討委員会は、委員長が招集する。  
2 委員長は、必要に応じて、第3条に掲げる者のほか、検討事項に関係する者に検討委員会への出席を求めることができる。

(委員会の公開)

第7条 区市町村社会福祉協議会職員等で検討委員会の傍聴を希望する者には、傍聴を許可する。

(事務局)

第8条 検討委員会の事務局は、東京都社会福祉協議会 地域福祉部 地域福祉担当とする。

## 「地域包括ケア促進モデル事業 検討委員会」委員名簿

No	氏名	所属	属性	備考
1	平野方紹	日本社会事業大学 福祉計画学科 准教授	学識経験者	委員長
2	山本美香	淑徳大学 総合福祉学部 准教授	学識経験者	副委員長
3	島村八重子	全国マイケアプラン・ネットワーク 代表	市民活動団体	
4	山本繁樹	立川市社会福祉協議会 立川市南部西ふじみ地域包括支援セン ター長	地域包括支援センター 受託社協	
5	鈴木博之	社会福祉法人 白十字会 東村山市北部地域包括支援センター 所長	センター部会推薦（セン ター部会支援センター分 科会長）	
6	疋田恵子	杉並区社会福祉協議会 地域福祉課 杉並ボランティア・地域福祉推進セン ター係長	モデル地区（杉並区）	
7	平由美	杉並区社会福祉協議会 ケア24梅里 主任ケアマネジャー	モデル地区（杉並区）	
8	妻屋良男	西東京市社会福祉協議会 総務課 福祉サービス支援係主査	モデル地区（西東京市）	
9	青木一恭	社会福祉法人 都心会 デイサービス課相談支援課長 （栄町地域包括支援センター）	モデル地区（西東京市）	

### オブザーバー

1	清水洋子	杉並区社会福祉協議会 地域福祉課長	モデル地区（杉並区）	
2	菅原智子	杉並区社会福祉協議会 ケア24梅里 所長	モデル地区（杉並区）	
3	鈴木美佳子	杉並区社会福祉協議会 総務課長	モデル地区（杉並区）	
4	小口浩司	西東京市社会福祉協議会 地域福祉推進係	モデル地区（西東京市）	
5	利光有紀	西東京市社会福祉協議会 地域福祉推進係	モデル地区（西東京市）	
6	横山桂樹	西東京市役所 福祉部 高齢者支援課 副主幹兼地域支援係長	モデル地区（西東京市）	
7	吉儀恭正	社会福祉法人 都心会 栄町地域包括支援センター社会福祉士	モデル地区（西東京市）	

事務局 東京都社会福祉協議会 地域福祉部  
 地域福祉部長 川井 誉久  
 地域福祉担当 統括主任 池田 明彦  
 地域福祉担当 主任 小野 明子

第1章

第2章

第3章

第4章

第5章

その他

## 地域包括ケア促進モデル事業 2年間の取り組み経過

	検討委員会／東社協	杉並区	西東京市
19年 1月	24日 都内区市町村社協に向けてモデル事業実施意向アンケートの実施		
2月	15日 モデル地区の決定		
6月	5日 第1回検討委員会		
8月	29日 第2回検討委員会		
9月			15日【社】 住民懇談会「わくわく栄」定例会の開催
10月	30日 第3回検討委員会	4日【社・包】 「合同ケースミーティング打合わせ会」の開催 ----- 25日【社・包】 「車いす体験会」の開催	20日【社】 住民懇談会「わくわく栄」定例会の開催
12月		10日【社・包】 「福祉学習会」の開催 ----- 15日【社・包】 「車いす体験会」の開催	11・20日【包・社】 「ささえあいネットワーク団体・協力員・相談協力員合同懇談会」の開催
20年 1月	15日 第4回検討委員会		15日【市・包・社】 「ささえあいネットワーク訪問協力員説明会」の開催 ----- 19日【社】 住民懇談会「わくわく栄」定例会の開催
2月			【包・社】 ささえあいネットワーク訪問活動の試行 ----- 16日【社】 住民懇談会「わくわく栄」定例会の開催
3月	14日 第5回検討委員会	25日【社・包】 「車いす体験会」の開催	

【社】 社協の取り組み 【包】 包括センターの取り組み 【市】 西東京市の取り組み

4月			23日【包・社】 「ささえあいネットワークモデル事業報告会」の開催
5月	27日 第6回検討委員会		15・16日【市】 「ささえあい訪問協力員養成研修」の開催
6月	中間報告書発行		
7月		15日～9月15日【社】 「災害時たすけあいアンケート」の実施	26日【包・社】 「ささえあいネットワークモデル事業報告会」の開催
8月	18日 第7回検討委員会	26日【社】 ケア24所管の高齢者施策課へモデル事業の取組を報告	
9月			18日【社】 「ふれあいのまちづくり事業振り返りシート報告会（事例検討会）」の開催
10月	29日 第8回検討委員会	7日【社】 （仮称）地域包括ケア会議の企画打合せ実施	
11月		11日【社・包】 「地域の防災とささえあいを考える会（夜の部）」の開催	
		14日【社・包】 「地域の防災とささえあいを考える会（昼の部）」の開催	
12月	22日 第9回検討委員会	12日【包・社】 「ケア24梅里地域ケア会議」の開催	
21年 1月		21日【社】 区「地域の日委員会」へ取組報告・提案	28日【社】 「ふれあいのまちづくり事業世話人連絡会」の開催
2月	27日 第10回検討委員会		24日【市】 「ささえあいネットワーク訪問協力員フォローアップ講座」の開催
3月	（4月以降） 最終報告書発行		

※検討委員会は、都内区市町村社協すべてに開催の案内をし、傍聴を可とした。

## 地域包括ケア促進モデル事業 検討委員会 審議経過

期 日／議 題	主な意見等
<b>1</b> <b>《19年6月5日》</b> 1. 委員紹介 2. 正副委員長の選出 3. 事業の趣旨と背景の説明 4. 各モデル地区の状況 5. モデル地区による取り組み 6. 今後のスケジュール	<p>○委員会では、「包括と地域をどのように結び付けていくか」「社協がどのような独自の役割をつくれるのか」「以上を踏まえて、社協と包括も含めた、地域の福祉のあり方」を検討する。包括は包括としてより良い機能を果たせるように、社協は社協として地域活動をより推進していくにはどうすればいいのかを検討し、両方をうまくマッチングさせていきたい。</p> <p>○社協と包括が地域の社会資源の開発をどのようにして協働できるのかといった視点、例えばネットワークづくりをどのようにして協働できるのかといった視点もあってよいと思う。</p> <p>○包括も社協も互いを十分理解していないことが課題である。</p> <p>○社協も包括もどちらも思いがありながら近づけていない気がする。当面は連携というより、包括を社協がどうバックアップしていくかを考える必要があると思う。</p>
<b>2</b> <b>《8月29日》</b> 1. モデル地区の取り組みについて 2. モデル地区における今後の進め方や方向性の確認等	<p>○杉並はどちらかというと社協と地域が強くて、後に包括がある。西東京はむしろ地域と包括が強くて、社協が少し弱い。三角関係が微妙に違う。「社協、包括と地域の三角関係をどうつくっていくのか」というのがこの研究テーマのポイントになってくる。</p> <p>○杉並からは防災、西東京からは独居も含めた高齢者の福祉の課題が出たので、いいモデル事業になると思う。社協は、杉並・西東京とも住民のネットワークと専門職のネットワークをつなぐ等の地域のネットワーク作りをうまくやるとよい。また、西東京では、市でなく住民主体の活動からミニデイが生まれてくるとよい。</p> <p>○杉並は次の課題に対してどういうネットワークをつくり、それをいかに全体化していくのか、西東京は、緩やかなネットワークの中で、出てきた課題に対してどういうネットワークをつくるのか、検討しなければいけない。また、共通課題として、ネットワークの担い手を広げていく方法を検討する必要がある。</p> <p>○要援護者で一番援護してもらいたいのは、ひとり暮らしで家族がいない人である。要介護5で重篤な人でも、家族がいれば、要支援のひとり暮らしの方が優先になる。家族など、その人個人が持っている資源を組み込むとよい。</p>
<b>3</b> <b>《10月30日》</b> 1. 各モデル地区の取り組み状況について 2. モデル地区における今後の進め方や方向性の確認等 3. 事例検討用のシートについて 4. 今後のスケジュールについて	<p>○両地区に共通するのは、地域や住民などが抱える問題と、援助する側がうまくマッチングしていないこと。これを解決しないと前に行かないことが浮き彫りになってきた。</p> <p>○杉並の試みは興味深い。自立支援法でサービスを受けていた人が、介護保険になった途端にサービス量が減ってしまい混乱が生んでいる。これをつなぐ試みというのは必要である。また地域の課題が何で、それに対して包括や社協は何ができるのかということをもう少し明確化していてもよい気がする。成年後見や日常生活の推進事業も含めたことを地域で今後どうしていくのかも考えないと、人の暮らしを地域でトータルに支えていくことはできない気がした。西東京の困難事例に関しては、包括、社協、地域の人たちで何ができるのかという問題がある。地域の人たちができることがどこまで、プロがやることは何なのか、社協がそこに関わりながら全体をつなげていく役割は何なのを、もう少しそれぞれがやっていった方がよい。</p> <p>○現在までの話では、当事者をどう考えるかということが共通している。援助する側のネットワークを今まで考えていたが、実は当事者の中にネットワークがある。当事者がネットワークを持って</p>

		<p>いて、こちらのネットワークともかみ合えばすぐ効果的になる。それぞれのネットワークがうまく合えば「面」として援助できる。もう一つの議論は、包括、社協はどういう役割分担をするのかということ。ネットワークをつくる時は、だれかが引っ張らないと動かず、その辺で社協がリーダーシップをとる部分、包括がリーダーシップをとる部分というのがあるのではないか。</p> <p>○西東京はルールづくりで立ちどまっているが、普通の人の感覚では、インフォーマルならば幾らでもやるけれども、フォーマルになることに対しては、怖いという意識がある。今までの実績があり、このままでいくのであれば、それ程仕組みにこだわらなくてもいいのではないか。臨機応変にやったことの後ろに仕組みができるのであり、先に仕組みをつくる必要はないのではないか。また、見守りは、自分のためにやるということ、将来自分がそうなるといけないときにどうあったらいいか、という視点でかわってもらえたらいいのではないかと思う。</p> <p>○日常的な関係を持った上でのネットワークなのか、日常的な関係がない上でのネットワークづくりなのか、それをどう分けて考えるかということは大事。それから、改めて社協が当事者組織ということに対してどのようにこれまでかかわってきたかということや、これからどうかかわっていきこうとしているのかをもう一度考えていく必要がある。見守協力員がやりがいを見出せずに、やめていく話があったが、細々とやっていることに対しては、活動を評価してくれる人が必要で、可視化できるようなものがあればよいと思う。</p>
<p>4</p>	<p>《20年1月15日》</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 各モデル地区の取り組み状況について</li> <li>2. モデル地区における今後の進め方や方向性の確認等</li> <li>3. 中間報告書について</li> <li>4. 今後のスケジュールについて</li> </ol>	<p>○場の設定、共有すること、ルール化すること、そういったことが大事だということが見えてきた。杉並と西東京の違いについては、杉並は事業所や情報が多くあり、制度もある程度整備されているが、あり過ぎてかみあっていない感じがする。場を設定し、共有することでうまくそれが機能する。西東京の場合は、程よい量だが、それがうまく機能できるのか。沢山あることでうまく動かない部分と、うまく機能できるかどうかという、23区内と区外の違いもある感じがする。</p> <p>○モデル事業の目的は、包括と社協が協働することで地域包括ケアを促進すること。もう少し具体的な協働による「達成目標」を言語化し、ほかの地域でもできるようにすることが大事。事例検討のような形で、プロセス研究などもできると思う。</p> <p>○社協のコミュニティワーカーとしての役割を明確にしておいた方がよい。</p> <p>○社協と包括がうまくかみ合って初めて住民が安心でき、だから社協も包括も「独自の存在意義」があることにもっていければよい。しかし、住民からすれば窓口は1つでそこが全部やってくれた方がよい。社協の側からすれば、包括と社協の両方がいて、それぞれの役割分担をもって地域にかかわるのが望ましい。</p> <p>○入り口は1つで、後ろでつながってくれるのが一番。</p> <p>○災害は、どこの地域でも一番考えなくてはいけないところで、特に行政が考えなければいけないので、非常に気になっている。行政は縦割りだが、いろいろな弱者を守れる体制をつくらなくてはいけない。</p> <p>○「何かをやりたい」という住民はあちこちにいるが、相談に行ける場所がなかなかない。社協はそれをやってくれるはず。わき上がったものを汲み取っていくような活動があるといい。また、民生委員が制度のことを知らないことがあるが、ある程度わかってもらいたい。民生委員も専門職の話がわかるようになって、お互いの特性がわかり情報交換がうまくいく場があると住民は安心できる。</p>

<p>5</p> <p>《3月14日》</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 各モデル地区の取り組み状況について</li> <li>2. 中間報告書（案）について</li> <li>3. モデル地区における20年度の進め方や方向性の確認等</li> <li>4. 今後のスケジュールについて</li> </ol>		<p>○杉並は新しい試みをしたけれど、なかなか枠を超えられない課題、また障害者の問題を取り上げているが、地域包括との関係をどのように具体的に詰めていくのかというのが少し課題になってきた。西東京の方は、この活動をあわせて社協としての視点をもっと切り込む必要がある。</p> <p>○現状、地域の課題、目標を明確に設定し、包括と社協が連携することによって地域のインフォーマルケアを充実させて、地域ケアを少しでも向上させていくという目的があるので、それに向けての具体的な達成目標が何なのかというのがもう少し明確になったらいいと思う。もう一つ、社協側からこういう働きかけをして、包括も協力して、お互いにこういう連携をして協力体制をとったからこういうふうになったというのがもう少し見えてくるといいと感じた。</p> <p>○ある意味では異質なものの組み合わせであることから、補うわけでも役割分担でもなく、むしろ新しいものとして考えなくてはならないことが2つある。1つは、溝をうめるというネットワークだけではなくて、相乗効果をどう作るかということ。もう1つは、相互の入り組みをどのように行うかということかと思う。</p> <p>○最終ゴールは、基盤づくりとそれを活かすための個別ケアとの融合によるシナジー効果という二つだろうと思う。また、プロとしてそれをどう形にしていけるか、可視化していかっていくことが非常に大事になる。それを他地域にも広げていくということ、それだけではなく今後、それぞれの地域がよりよい活動をしかりつくっていくためにも、とりわけ住民の方にもわかってもらうことも含めて、そのことは非常に重要なポイントになると思う。</p> <p>○地域の基盤づくりといった当事者意識を持った住民の活動を進めていくのが本来の社協の仕事であり、それを地道にやってきたと思うが、まだ目に見えていないというのが都内の状況だと思う。いろいろなキーワードが出たが、ほどよい距離とか、信頼とささえあいのネットワークをつくっていくということが、改めて重要になっている。</p>
<p>6</p> <p>《5月27日》</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 中間報告書（案）について</li> <li>2. 各モデル地区の状況</li> <li>3. 今年度のモデル地区の達成目標と進め方について</li> <li>4. 今後のスケジュールについて</li> </ol>		<p>○中間報告は、現在既にできていること、両者が力を合わせたことにさらにどういう積み重ねができて何が生まれたのかというのがもう少し前面に出てくるといいのかなと思った。</p> <p>○中間報告として都内の区市町村社協はもちろん、センター部会にも協力をいただき、経過報告などもしていることから、1年目のはじめということで、関係者に報告をし、今後こういう方向でさらに進めていくというような位置づけに思っている。</p> <p>○この検討委員会そのものが一体だれにどういうメッセージを出すのかということがこれから1年間の課題になってくる。</p> <p>○杉並は、もう一回防災というところに立ち戻り、地域の目という地域包括支援センター、地域の手という社協、両方がうまく組み合わせられることでやっていく。そのためには、もっと中間色のものをどちらも持ってくる。それによって両方がうまく組み合わせられれば本当に安心できる町になるんだという絵をゴールにする。これによって両方の機能を高めていく。</p> <p>○高齢者で表に出てこない方々というのは非常に大きな生活課題を持っていらっしゃるという実態がある。そういう方たちにどうやって踏み込んでいくのか。そういう仕組みは一つ必要じゃないか。さらに、地域で高齢者を支えるということで考えていくと、いろいろな活動が地域の中で行われている。それぞれの場所でもかなり共通した人間がかかわっている。そういう意味では、地域包括支援センターの立場からいけば、市全体に広げていくときには行政を中心として全市でどう取り組んでいくのかという、検討の</p>



		<p>場を明確につくっていくということが非常に重要だと思う。</p> <p>○西東京市は、高齢者にとって、つながる入り口がたくさん用意されているように感じる。高齢者には、アウェイ派とホーム派があり、ホーム派の人にとっては来てもらわないと出ていけない。それをきっかけに外へ目が向いていく。アウェイ派の人はふれあいのまちづくりに門戸が開かれていると、それが幾つもあると、どこか行けるところがあるという安心感が出てくると思った。</p> <p>○西東京市社協のイメージ図を見て、人材育成のところは期待したい。そこでどのように包括ネットワークというのは、一面的に考えるが、階層が違うネットワークもある。例えば、地域包括支援センターのネットワークと社会福祉協議会のネットワークという階層が違うネットワークが、うまく組み合わせることで漏れがなくなる。住民からすると、シームレスと同時に漏れないネットワークが必要である。1つの面でネットワークを作るのではなく、縦に重層でもなく、横に1枚でもない、ずれがある立体的ネットワークである。</p> <p>○今全体をお聞きして思ったことは、西東京市に関していうと、一番下は行政のネットワーク、その次に地域包括、その上にさらにふれまちななどの民間のセーフティネットという重層化になっている。同時にそれが権利擁護という横系ネットワークもあれば、たすけあいというネットワークもある。それがうまく機能するようにするにはどうすればいいのかというのが一つ課題となっている。</p> <p>支援関係を考えるときには、垂直的支援関係と水平的支援関係がある。垂直的支援関係というのは福祉職のような関係。水平的支援関係というのはまさに住民の助け合いになる。どこが違うかといえば、垂直的支援関係というのは援助する側ができるという前提になる。地域包括なら必要なことは全部できる。一方、住民の場合、できないということを前提で組むのが本来の地域福祉になる。もともとは水平的支援関係をつくっていくことだと思う。</p> <p>杉並の方では、社協の活動としては防災活動をするのが活動ではない。極論すると、地域の住民に地域に目を向けてもらうことが重要である。お互いにネットワークができることが、その一つのきっかけとして防災というのをつくっていく。要するに地震対策をするのではなく、地震があっても地域でまともまっていけるような地域をつくることだと思う。もう一つ、今の防災学は、防災学プラス復興学だと言われている。ただ命を救うだけじゃなくて、災害をどう減らすか、そこからどう復興するのかということ。地域のつながりがあったところが復興できた。そう考えてみると、復興ということもつなげて考えてくれば、地域をどう考えるかとか、つながりがどうなのかということを検証していく。実は、福祉の防災というのは案外そんなところにある。</p>
<p>7</p>	<p>《8月18日》</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 各モデル地区の取り組み状況について</li> <li>2. 各モデル地区の今後の進め方について</li> <li>3. 今後のスケジュールについて</li> </ol>	<p>(杉並区について)</p> <p>○社協の役割とすればまさにファシリテーターで地域のニーズを掘り起こしや、面としてつくっていき、地域の目と地域の手の、目の方をふやすこと。もう一つは、サポーターの人たちにハードルを下げて参加してもらおう。それとあわせて地域包括の方は専門職のコアの部分を固めていく。地域包括の役割と社協の役割をうまくかみ合わせるという方向。その両方がうまくまともれば福祉圏域というのがまともるような地域をつくる。</p> <p>○この災害アンケートで住民が災害時に「こんなことならできる」といっている事項はすごい財産だと思う。これで終わらせない</p>

で、自分ができることは何かというのを一人一人が自覚できるような、仕掛けがあったらと思う。

- アンケートで、町内会・自治会への加入方法がわからないという方が54.5%というのは非常に大きい数字。地域にかかわりたくないというはむしろ少ないという感じがした。この加入方法がわからない人たちにどうアプローチしていくかということ、大事にして再考されたらと思った。
- 今回のアンケートで学校を活用したのは良かった。回答の6割が30～40代で専業主婦が40%。社協の活動はいつも50～60代が多いので、日ごろつかんでないところをつかんだというのはいい結果ではないかと思う。

(西東京市について)

- 市報で見守りを希望する方が8ケースでできたということはどう評価するのだが、個人的には、8ケースあっただけでもいいという気がする。本当に援助してほしい人は反応してこない。逆に言えば、この8ケースの裏側に物すごい数が、10倍、20倍くらい、実はいるということだと思う。
- 今回のモデル事業の分析で、栄町包括が支援が必要な人を見つける力があつた、ということだが、もしなかった場合どうすることが考えられるか。→今回ふれまちでやっている振り返りシートの報告会などで、地域との接点がある社協のコミュニティワーカーがその発見の目をあわせて持つことで、お互いに補完し合い、関係を持ち合うことで重層的なネットワークに発展していく。ここが社協的な大きな課題になっている。
- 子供が心配しているニーズはとて多いと思う。「遠くに住む親御さんが心配な方へ」と一言でもあると目がいくと思う。少しずつじっくり事例検討を積み重ね、地域で信用のできる仕組みにしていくと、安心して住める地域としての本当の第一歩かなと思った。

その人がその人らしく地域で暮らしていく、だから、ゴールを決めないで、今の状態をよりよくしていくことの積み重ねであり、時間をかけてほしいし、ゆったりとやってほしい。

- ふれあいのまちづくりは支え合うという地域をつくっていくのが目的。ふれあいのまちづくりから専門職につながるということ。気になる人を専門職につなぐ、そのつなぎ方を言語化し、かわっていくことが重要だと感じた。

また、申請はしないけども見守りが必要な人はいて、幾つかのタイプがあつて、それを全体にどうしていくのかが今後システムをつくっていく上では重要になってくると思う。

- 両地区とも、どう信頼されるかという問題がある。信頼には3つあると言われる。一つは機能的信頼でこちらが持つ機能が信頼されている。平たく言えば権威とか資格となる。2番目が人間的ということで、これには時間がかかる。この人は信頼できる、この人は大丈夫だというもの。これは長い時間をかけてつくっていくかなければならない。3つ目が実績。この道何十年という実績で選ぶ。社協の機能で考えると、住民の側から見たときには社協の機能はわからない。まして人間的なことを考えれば時間がかかる。そうするとやっぱり実績の部分が多い。

<p>8</p>	<p>《10月29日》</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 各モデル地区の取り組み状況について</li> <li>2. 各モデル地区の今後の進め方について</li> <li>3. 今後のスケジュールについて</li> </ol>	<p>(杉並区について)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○災害アンケートは関心の高さが見えるので、それを無にはしていないと思う。講演会などを継続的に行うことで、モチベーションが高くなり、自分にもできることに気づく。</li> <li>○地域福祉という視点で考えると、アンテナと発見・通報の間に、「提案者」が必要。そうすると地域に目が向き、実現するためにどうするかという話し合いになる。そこに社協が入り、提案して、プランの検討をする。既存の枠ではだめで、地域のネットワークも作らなければならない。そこに社協が入っていく意味が出てくると思う。</li> <li>○提案者として考えると、あまり広くない方がいい。広くなればなるほど抽象的になるし、専門知識が必要になる。小さい地域であればあるほど、具体的に生活感覚でしゃべれるようになる。そのよさを大事にした方がいいと思う。</li> <li>○「行政だけでは住民が救えません」という言葉にすごく象徴されていると思う。そして、社協はそのお手伝いをできる最適なポジションにいる組織だと思う。</li> </ul> <p>(西東京市について)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○相談や問題発見が地域ベースなのか、公的な機関ベースなのかというところで大きく2つに分けられる。それから、地域ベースで入ってきたものは公的な方に働きかけを、公的ベースで入ってきたものは地域ベースに働きかけをと、お互いの支援課題への働きかけがあって、こそがしっかり重なっていくためには、地域の人材が大きな役割を担っていく。地域の人材を活かす社協であったり包括であったり大きな役割を果たす。入り口がどちらであっても、それが住民ベースでできる連携はそんなところにある。</li> <li>○訪問協力員を拡大していく中で、ふれまちにかかわっている人たちとダブる。つながれる人材を浮き上がらせるというところは、訪問協力員を養成するタイミングで、さらに今まで以上に、個の力を把握し、つなげていく人材活用は重要だと思う。</li> <li>○社協と包括の役割が似てきたということだが、住民側からすれば常にシームレスでなければ困る。同じだからどっちかがやめようでは困るので、重なっていればどっちからでも入れる。相談に行く場所は多ければ多いほど行きやすいところに行って、連携する状態がどこに行ってもできればいい。 普通の住民にとっては、地域に住んでいるキーパーソンの人たちが社協のことも地域包括のことも理解していると、相当スムーズにいく気がする。</li> <li>○今回見てみると、キーパーソンになっている人たちはみんな金太郎あめの人たち。つまり、これまでは「金太郎あめが問題だ」と言っていたが、実は、2つ3つの役割を果たしていて、それが逆につながってきた。</li> </ul>
<p>9</p>	<p>《12月22日》</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 各モデル地区の状況と到達点</li> <li>2. 最終報告書について</li> <li>3. 今後のスケジュールについて</li> </ol>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○SWOT分析は、社協の強みをできるかぎり出す。今地域に貢献しているのかという強みをできる限りだし、その上で包括とどのようにつながれるかを表す。小地域で、形をあらわさないで徹底的につなぎ役に徹するのも一つの役割だと思う。高齢、障害、子ども、サラリーマン含めて、いろんな人たちをつないでいくという役割を社協はできる。裏方の役割を押し出した方がいいと思う。</li> <li>○地域のネットワークに参加したくてもできない人たちをどう捉えていくか。地域への関わり方というのはいっぱいあるというメッセージを出す。地域というのは、自治会活動に参加できない人たちを、変な目で見られる。今までできていた自治体活動がで</li> </ul>

		<p>きなくなってしまうと、私はここにいていいのだろうかと言いつす。そこをどう出していくのかは大切なこと。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○社協は市全域で、世代を超えた部分で面が広いだけでなく高さもある。赤ちゃんから高齢者までの課題や問題も見られる、感じられる、何かやれる立場にあるというのは非常にいい。だから社協と包括は、その部分の小さいところなので、連携してつながっていないと本来の包括のよさも出せない。</li> <li>○参加の仕方という、地域に住んでいてもいいんだというものをどうつくっていくか。つながりがあるというのをどうつくっていくかというのは社協の役割だと思う。だからそれを何か目に見える形にしていくべきということがあると思う。</li> <li>○包括から見ていて、社協は鈍牛のように見える。包括はわかりやすい。スピードもあるし、個別相談をやっているし、日々忙しい。だから目に見えないんだけど、何かやってくれるというのを見せてほしいというのが希望。</li> <li>○社協に助けてもらいたい。社協のいいところを分けてもらいたいというのが包括の気持ちだと思う。包括ができることも、これだけ専門職がそろっている機関は本当にないので、やっぱりそれは活かしてもらいたい。だから強いところと強いところでつながりたいと思う。それを報告書にあらわしてもらいたい。</li> </ul>
10	<p>《2月27日》</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 各モデル地区の報告</li> <li>2. 最終報告書について</li> </ol>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○「事業の背景および狙い」のところで社協のことが中心で書かれているが、包括側の現状というのをも分析して、両面併記で、だから両者の結びつくことが必要だというようなことが必要では感じた。</li> <li>○2つのモデル地域で社協内の組織内連携をどう図られたのかという課題というか、提案を是非してもらいたい。</li> <li>○ネットワークをもう一回つくらなければいけないじゃないかということも3つぐらい並べて、社協や地域包括はこういう問題を抱えているんだという並びにした方がすっきりして、住民というのを一番の視点に持っていった方がいいと思う。</li> <li>○内部での話し合いとか、共有のことは書いてもいいと思う。それが今回の連携についての1つのポイントだったと思う。それを情報共有して、どういう課題があって、結局目指すところは一緒だが、それぞれのアプローチで、情報を共有していこうということが重要。</li> <li>○ものが変わるところがある。どこかでガラッと変わるという。今回も、必ず取り組みの変曲点がある。どこかで変わる場所が。1年目、2年目で変わる。つまり、変曲点というのがわかると、変曲点を知りたいというのがある。なぜ変わったのか、どこで変わったのか、それが見えてくると、流れが読めると思う。</li> <li>○社協と包括が結びつくことの意味合いは地域住民にとってどうなのか。結局、ソーシャルサポートネットワークをつくるのが、サポーターである人は幸福だろうし、サポーターでなければ負担感は増すと思う。だからそういった今回の取り組みも含めて、地域にそういうネットワークをつくっていくということがどういう意味を地域の人たちは持つのかということも、これは一つの重要なところと思う。</li> <li>○市民に担える役割の範囲の活動なのかの確認を考察する必要がある。</li> <li>○新しい担い手となる人の動機づけというのはとてもかぎになると思っている。だから、明日はわが身というところに行くということもあるし、地域に役立つ自己実現というところに行くところも書いてもいいと思う。</li> </ul>